
～最後の願い～

S

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の願い

【Nコード】

N3900A

【作者名】

S

【あらすじ】

何度も恋愛を失敗し続けている中学2年生の大原は、ある日、関山と言う女子に付きまとわれるようになる。最初はとまどっていた大原も、段々と関山に好意をよせるようになるが、最後に思わぬ展開が大原を待ち受けていた！！果たして二人の恋の行方は???

第1話・く接近く（前書き）

読んでいただくと 嬉しいな
な

第1話：～接近～

あれは俺が中2の時だった

14歳。この年は俺の人生の中で最も転機を迎えた年だった。小学の時に同じで、中学に入ってから離れてしまった親友達と毎日の様に煙草や万引きなどの非行に走った。勿論、恋愛もした。恋愛と言っても付き合っただけで、すぐにはふたり、ふられたり。

長続きしない、とても恋愛とはいえない恋愛だった。何度も

「次はもう彼女は作らない。」

と自己暗示しながらも繰り返してしまう恋愛。

そんな自分に苛立ちを覚え始めた中2の秋頃。

俺はある一人の女子に付きまとわれるようになった

彼女の名前は、関山^{セキヤマ} 美沙^{ミサ}。俺と同じ4組で、とても活発で明

るい女子だった。話した事はあまりなかったが、女子の間では関山が俺を好きだと言う話が有名らしく、教室での女子の会話に、度々俺と関山の名前が出てるのを聞いていた。

「なあ、大原は関山をどう思ってた??」

2時間目が終わり、中休みに入った時、いつも一緒にいる5人の親友達、通称：イツメン のメンバー達と暖房の前に溜って話をしている時、メンバーの一人である瑛太が興味深そうにやけながら俺に聞いてきた。

「どうも思ってたねえよ!? 話した事あんまないし、好きか嫌いかなんて言えるかって。」

苦笑いしながら俺は答えた。

「そうなんだ！？そういえば、大原と関山が話してるところ見たことないな。」

イツメンの颯太^{ソウタ}がそう言いながら、奥にある掃除箱の方へ目を向けてる事に気づき、俺はその視線を辿るようにその方向を見た。

関山！？

彼女は友達と話していたが、こっちの視線に気付いたのか、目が合った。

「う」

思わず俺は目を反らした。反らす瞬間、彼女が赤面しているように見えた。

放課後、多目的室で学年の各委員会の長で話し合いがあった。室内はとても広く、何処に座っても良かったのだが、俺は敢えて窓際の縦に並んだ机の椅子に座った。

「まだ来てない奴いんのかよ あゝ俺のお口がニコチンを求めている

」

ぼさつと呟くと、横に座っていた、いかにもガリ勉男の厚生委員長^のの視線を感じ、

「よっ」

と俺は立って体を左右にねじった後、座って外を見た。その時、丁度遅刻組が威勢よく多目的室に走りこんで来た。

「遅れてすいませ〜ん！！」

何人かの女子の声が聞こえた。

「この声」

まさか、と思い俺は勢いよく振り向いた。膝を机にぶつけ、頭

を一瞬うずくめたが、すぐに頭を戻す。

目の前には関山がいた

第1話：接近（後書き）

読んでいただき感謝（；；＊）！！

第2話・接触（前書き）

第1話「接近」の続き、あの後大原はどうなったのでしょうか！？

第2話：接触

「え、あ、う」

俺は突然の事に動揺隠せずにいた。

「な、なんで！？そ、そうか、確か保体委員長転校したから関山が代わりにって、それにしても何故！？席は他にもたくさん どのようにする俺！？」

「やつほ」

俺の心境を知ってか知らずか、関山が挨拶をしてきた。俺は未だ動揺を隠せず、頷いて

「おう」

と小声で返した。

「それでは間近に迫った学校祭の仕事分担について再確認します。」
学習委員長が各委員長の仕事分担を、プリントで読みあげていった。

「ねえねえ、大原ってメルアドとか持つてる？？」

突然、積極的に話しかけてきた関山に、俺は

「携帯」

と単調に答えた。

「そつか！いいなあ、美沙、PCなんだよね。あ、だったらメルアド教えて？？」

「ぐはっ、展開が早すぎる！？こんな女子今までで初めてだ」

そう思っていると、関山が

「駄目？？」 と言って、胸ポケットから出していたシャーペンをしまいかけた。

「いや、全然okだよ！！うん、何か紙ある？？」

彼女はニコツと笑うと

「私が教えるから、生徒手帳貸して。」

と言つて、俺の胸ポケットから半ば無理矢理生徒手帳を取り出した。

「はい、これ！！メール待つてるね。しろよ??？」

俺の方へ顔を突きだし、上目使いで念押しされた。

夜10時に塾から帰宅し、真っ先に階段を駆け上がり自分の部屋へと向かった。制服のまま塾へ行ったので、部屋に入るとすぐに生徒手帳を取り出す。

「『やつほ』o(^-^)^o』つと。」

メールが送信された事を確認し、SevenStarを愛用のZIPPOでふかした。半分まで吸うと、俺はそれを揉み消して新しい煙草を口に加えた。すると、ズボンの後ろポケットで今流行りの歌が流れてきた。携帯を開き着信メールを見ると、案の定、関山からだった。

「『やつほ 美沙だよ！！メルありがとo(< >*)oこれからよろしく』」

俺は

「『ああ、よろしくな(*^ー^)^』」

と適当な返事を返し、夜中まで世間話をした後

「『もう寝るなwメルサンキュ また明日学校で、(*^ー^)^』」と送り、SevenStarを2本吸った後、床についた。

次の日、教室へ入ると関山が入口の手前で会話をしていた。そして俺に気付いて、小さく手を振ってきたので俺も小さく手を振り返した。

「関山とメルアド交換したんだってい??？」

いつもの様に暖房の前に行くと、瑛太がにやけて聞いてきた。

「え、あ、うむ。」

手でワックスのついた髪をいじりながら曖昧な返事で俺は返した。

「関山も本当積極的なんだなあ。」

イツメンの悠介ユウスケが片眉を上げてそう言った。

「まあ、こんなイケメンを見ちゃうと、どんな女子だって聞きたくなっちゃうさ。」

笑みを浮かべながらそう言った颯太に、俺は

「なっ！！」

と右腕を振り上げた。

「まあまあ、抑えろよイケメン」

瑛太と悠介が俺の腕を掴んで下ろさせた。

「お前ら」

担任が教室に来たので俺は瑛太達に呆れつつも、奥の一番窓際にある席へとついた。

1時間目から4時間目までの授業の後半はほぼ寝ていたが度々、廊下側の席に座る関山と、その近辺に座る女子の笑い声で起きる事があった。

昼休みはいつものように担任の目を避けながら1階と2階で鬼ごっこをした。

「そろそろ戻るか。」

一緒に鬼ごっこをしていた隆也タカヤ達にそう言っていると、皆で教室へと向かった。隆也とは最近仲良くなり、たまに俺の家で飲み会をしている友達だった。

汗をYシャツの袖で拭いながら教室へ戻ると、教卓の周りに人が

悠介や颯太、関山と女子数人集まっていたので、何かと思い悠介の肩を叩いた。

「5時間目の最後に席変えするらしいぜ??」

「そいつはまた唐突な。」

今の席がとても気に入っていたので、残念に思いながら苦笑して席についた。

5時間目が終わる頃、担任が学習係を呼び席変えのクジを用意させた。

「運まかせかい、あゝ今の席&俺のアイドル尾美さんの横になれますように」

「はは。なれると良いなあ、関山さんと。」

すぐ隣に並んでいた颯太の頭を軽く叩いた。尾美とは俺が少し想いをよせる、背が高く、ストレートヘアの俺的に相当タイプな女子の事だ。

「おっ先」

そう言つて、颯太がクジの入った大きな封筒に手を入れた。颯太が引き終えると、直ぐ様俺もクジを引いた。

クジには「超気持ちいい!!」と書いてあった。

「なんだこれは」

苦笑を浮かべながら俺は暖房の前で隆也、瑛太と話しながら結果を待った。

「席の場所を書いた席順貼るから、見に来て」

全員が引き終えた事を確認すると、担任が大声で言いながら黒板に紙を貼った。

「さてさて 結果はどうなったかなあ??と」

俺は隆也達と黒板に歩み寄って行った。

第2話・接触（後書き）

第3話をお楽しみに（*・こ）b

第3話・学校祭（前書き）

第2話からの続き

第3話：学校祭

「はは。どれも変な言葉ばかりだな。」

大きく拡大された席順には「へえ」や「味のＥＴ革命や」など、俺のクジとさほど変わらない変なクジばかりだった。

「一え、自分の席見つかったかあ??」

隆也が、クジを凝視していた俺に問掛けてきた。一とは、俺の下の名前で、一と呼ぶのは隆也ぐらいであった。

「ん!? あ、意識とんだ。何処だろな　おお!! 今の場所だ」
奇跡的(?)にも、俺は今のお気に入りの席を引き当てていた。

「おお!!—!!俺その前だ」

俺は隆也とハイタッチを交わし、黒板に貼られた紙を横目で見てみた。

「助けて下さい!!」と書かれていたのを見て、思わず俺は吹き出し「なんだ、助けて欲しいのか??」

「超気持ちいいって—こそ、何いやらしい事してんだよ。」
と、見事な反撃をくらった—　—　○

そう話ながら、自席につく。

「そっぴゃ横は誰なんだろ　尾美さんかなあ」

鼻の下が伸びていたらしく、目の前の隆也が笑いながらデコピンをしてきた。

すると、横で大きく椅子を引く音が聞こえた。

ドーン(○ ○ ;)

そこには関山がいた。

直ぐ様教卓のすぐ近くに座る颯太に視線を送る。後ろの人と話していた颯太がそれに気づき、ニヤリと笑った。

「わお！？隣だ！？すごい偶然だねえ！！」

「ほ、本当になあ！！なまらびつくらこいたあよ。」

不自然な反応に、関山はクスツと笑った。

イツメンで校舎沿いにある、車の通りが少ない広い道路の真ん中を帰っていると、横から突風が吹いてきて、俺の髪を崩していった。手ぐしで髪を融かしながら風が吹いてきた方向へ顔をやると、いつも通る公園の木々が鮮やかに秋の色を帯びていた。歩きつつもそれを眺め続けて上の空になっている俺に気付いた颯太が

「どうした？？色男」

と言つて来たが、怒る気にもなれずにスルーした。

「中坊にしちゃ吸いすぎか？？まあいいが、煙草代も馬鹿にならないなあ」

俺は部屋のベランダで、煙草をふかしながらふと考えていた。

PM・9：30 学校から帰ってきて塾へ行ってくる。ここまで6時間程だが、朝買ったばかりの煙草は残り2本となっている。

制服の胸ポケットに入っていた携帯が鳴った。

「『来週いよいよ学校祭だね（o・v・o）頑張つて 主役さん

』」

俺はクラスの選考を承けて、劇の主役を務める事となっていた。

最初は嫌だったものの、ヒロインである相手役が尾美に決まった時、俺の迷いは消え去った。

今日は週末だし長くなるかもな。

そう思っている隆也からメールが来た。「『来週学校祭ですし、出陣式みたいな感じで、パーティーと飲まないかじゃあ!?』」突然ではあったがベランダにはチュウハイが数本とボトル焼酎が2本丸々残っていたし、悪くはないだろうと思い、直ぐに来るよう返事をした。その後、ヒロインの友達役として劇に出演する関山に「『頑張るあwま、最高の出来にしたるさw頑張ろうな』」と返した。

1時間後に隆也が青いジーンパンに黒のインナー、茶色のコートをはおって部屋へ入ってきた。俺の部屋は8畳間でフローリングがひいてあり、一角にはMDコンポ、テレビ。その反対側にベッドがあり、中央には小さなテーブルが大小の2つ並んでいる、シンプルな部屋だ。

俺は、上着を脱ぎ捨てベッドに腰掛けた隆也にチュウハイを投げた。

「さ、んぢや早速!!男二人の乾杯といきますか 来週の学校祭頑張る」

「一と美沙に乾杯」

ここでもか!?!と落胆した俺は、がつくりと頭を落とすと同時にテーブルに顔面を強打した。

「ふご!?!」

隆也の笑い声とともにチュウハイの炭酸の音のはじけた。

関山とは互いに相手を探り合うようなメールが続けられていたが、隆也の気分を害してはいけないと思い、状況を説明してメールを打ち切った。

「実際さ、一の好きな人って誰なんさ?」

まだ半分も空けてないのに、隆也は早くも酔い気味だった。俺は

そんな隆也の質問に答えようか迷ったが、場の空気を読んで答える事にした。

「実は 尾美なんすよ 内緒だぞ！？これはこの場だからこそ話してんだから。」

俺は隆也が持ってきた菓子を摘みながら言った。

「え、遥^{ハルカ}だったの！？な、なんかすごい意外だはあ！！」

酔いが少しひいたのかと思っていたが、やはりそうでもないようだった。隆也は口火を切ったようにどんどんと尾美について質問をしてきた。

「いつから？？何処に惚れたん？？」

俺は正直に質問に答えていった。隆也は俺からの返答に耳を傾け、度々相槌を打っては頬をあげていた。

一通り質問を済ませると、隆也は少し黙り込み、煙草を指に挟みながら何度かチュウハイをすすった後、口を開いた。

「告つたり しないん？」

それは

一瞬脳裏に関山がちらついた。もし俺が、好きな人は尾美なんだとか、億が一、告白してOKされて、付き合う事になったりしたら関山はどんな事を思うのだろうか。そんな事を自然と考えてしまったのだ。

「やっぱ、美沙の事が気かりなんだろう？」

俺の反応を予測していた様に聞いてきた。

煙草をふかし、いつものように途中で揉み消してから俺は言った。
「まあ な。だが、尾美には告ってみようって思う。やっぱ関山の気持ちには答えてあげたい。でも、俺も関山と同じように好きな人がいるわけだしさ、他人に情けをかけないで自分の真剣な気持ちを

尾美にぶつけてみるよ。」

10月27日。学校祭の日がやってきた。

生徒が体育館へ椅子を持ちながら入場していく。各学年が担任の誘導で、各自の位置に着くと体育館の照明がおとされ、暗幕からはわずかな光が洩れていたが、ほぼ真っ暗な状態となった。

「静かにして下さい！！」

三年生の生徒会役員が、スポットライトに照らされながらステージへ上がってきた。しばらくしてから館内のざわめきが治まると、生徒会役員の合図で軽快なBGMが流れてきた。

「それでは！！これより学校祭の始まりでえーす」

アニメ声優かと思う程の可愛く、甲高い声がスピーカーを通して館内に響くと、周りでは男子の歓声や女子の罵声で騒がしくなった。

去年の学校祭は時期が少し遅く、この地にも雪が積もっていて館内の暖房は全て動いていたが、それでも寒く、隣に座っていた女子と「寒いねえ。」などと話していたが、今年は身長の変化もあった為に、俺の横には尾美が座っていて、俺は緊張のあまり言葉すら発せずにいた。

ああ、すぐ横には尾美がいるというのに

既に最初の1年生の劇が始まっていたが、尾美の事を考えていてまともに見てもいられなかった。

「ジー」

そんな無情な時が過ぎてる間に、劇の終わりを告げるブザーが鳴った。

「はあ もう終わったのか 次じゃんよう」

再び真っ暗となった館内にスポットの明かりがつき、役員と一般生徒が出てきて幕間の質問タイムと言うものが始まった。

ため息をつきながらも、衣装に着替えに行く為、席を立とうとした時、すぐ横から肩を叩かれた。

「主役さん、よろしくね お互い頑張ろう!! あゝ緊張するう。」

バコーン(○○、!?)

あ、あ、アイドルが俺に!?

俺は興奮し過ぎたあまり、おう!!と大声で返事をしてしまい、周囲からかすかな笑いと視線が飛んできた。俺はそれから逃れるように、ステージ横にある更衣室へと走った。

「ジー」

幕間が終わると、始まりを告げるブザーがなった。

劇の内容は、もうすぐ中学を卒業する主人公が3年間片想いを続け、卒業と同時に引越してしまうヒロインの女子に、友達からの助けをもらいながらも告白を決意する話だ。

ブザーが鳴り終え、幕が開くと同時に、ステージ中央に置かれたベンチに腰を下ろして、制服を着た俺と、友達役の颯太の会話が始まる。

最初は多少緊張していたものの、笑いをとるところで上手く笑いを取れたお陰で、緊張もしくなくなり、練習通り順調に劇は進んだ。

「おっと、次は私服の場面か」

学校の話から放課後の話へと場面移りをする為、照明と幕が閉じ、

ナレーターの話が始まった。

出演者はその間に、女子から先に更衣室で私服へ着替えるよう言われていた。

俺含む男子勢は、女子達の着替えを真つ暗な幕の内側で待っていた。すると、すぐ横から関山の声が聞こえた。

「紗弥早く！！うちらだけ出遅れてるって！！」

不意に俺の手が関山に引っ張られる。

「な！？ちょ、ちょ！？」

どうやら関山には聞こえてないらしく、強く握られた手は離れなかった。そしてそのまま、洩れた光を頼りに更衣室へと俺は関山に引っ張られていった。

「キヤーー！！！！」

着替えていた女子達が、俺を見て大声で叫んだ。

「え！？大原！？そんな、紗弥だと思つてたのに！？」「ごめん。」

関山は手を離し、俺は直ぐ様更衣室から出た。

幕が開いてからの劇は、女子達から痛い程の軽蔑の視線が投げられ、とても気まずかった。関山の方へ視線をやると、一瞬目が合ったが、すぐに関山はうつむいた。やはり罪悪感を感じているらしい。

30分の劇も終わりに差し掛かり、俺が尾美と向き合い、告白をする場面になった時、尾美が小声で凹んだ俺に言ってきた。

「さっきのは全然気にしてないから。告白なんだから、もっと男らしく！！」

俺は大きく頷き、尾美、いやヒロインへと告白した。

「ずっとお前の事が好きだったんだ、最後にせめて、これだけを伝

えておきたかった!!」

彼女はニコツと笑うと、

「私も実はあなたが好きだったの、すごい嬉しい。気持ちを伝えてくれてありがとう。」

と、台本の台詞通り答えた。

その後、終わりのブザーとともに幕がしまり、体育館からは大きな拍手がおきた。

劇が終わった後、昼食をとったり、劇を担当しなかったクラスの展示教室を見て回る為の休憩時間がとられた。

俺とイツメンメンバーは1年生の教室がある4階の売店で昼食を買うつと、1年4組の教室で昼食を食べ始めた。

「どうしたよ、一。」

ハンバーガーを食べ終わり、ため息をついた俺に隆也が話しかけてきた。

「いやあ、さっきの尾美の言葉が本当だったら嬉しかったのになあ、なんて。って、あ!？」

俺は颯太や瑛太、悠介がいる事を忘れ、うっかり答えてしまった。

「え!?大原って、尾美が好きだったの!？」

全員が全く同じタイミングで驚いた。

「あちゃー。」 隆也が苦笑しながら額へ手を当てた。

俺は何度も誤魔化したものの、颯太達には当然通じるわけもなく、俺の好きな人が尾美だと言う事を知られてしまった。

「てつきり関山かと思っていたが まあ頑張るんだな。」

颯太が焦っていた俺に、大笑いしながら言った。

「はいはい。」

いつもながらにドジな自分に呆れつつ、残っていたコーラを飲み干した。

一通り展示教室を回る終えりと、放送で午後の部が始まる事が伝えられ、生徒達が一齐に体育館へと戻り始めた。

午後の部は3年生の劇と、吹奏楽部の演奏、最後は生徒会からの出し物が予定されている。

3年の劇が終わると、吹奏楽部が準備を始めた。

「吹奏楽部何演奏するのかな??」

尾美が寒そうに手を擦り合わせながら言ってきた。

「あ、うん。気になるよなあ、去年も吹奏楽はすごかったからなあ」

「うん。遥、去年の演奏は聞きいっちゃったもん。」

劇の件もあり、自然と話せるようになってきた。俺はこの機会を利用して、さっきの礼をする事にした。

「あのさ、さっきはありがとな。結構凹んだから、すごい楽になつて助かったよ。本当感謝してる。」

すると彼女は笑顔でブレザーの裾を引っ張りながら、

「あはは 大袈裟だよう。でも、楽になつてもらえて良かった」

ドキーン（〇〇）

彼女の些細な仕草と喋り方に俺は心射抜かれた。

「んと、もし良かったらメルアド交換しない!？」

俺は勢いのあまり言ってしまった。俺は、ハッとして尾美へ向けていた顔をステージの方へと向けた。

「いいよー!!」

即答と言っているのだろうか。俺が顔を反らした後に、横から尾美の返答が返ってきた。

第3話・学校祭（後書き）

第4話も近々投稿ですのでよろしく）
、
、
（

第4話・慰労会（前書き）

第3話からよろしく、（

第4話：慰労会

11月2日水曜日。

朝テレビをつけると天気予報では初雪予想がされていて、6日に降る予想がされた。去年の今頃は山の方で初雪が観測され、その翌日の朝には札幌の景色が真っ白になっていたのがまだ印象に残っている。

学校祭で尾美とメルアドを交換して以来、彼女とは毎日メールをするようになった。と言っても、どちらかがメールの途中で先に寝てしまい、次の日の夜に謝りのメールをして会話が進んでは、またどちらかが寝てしまうという事の繰り返しだ。無論、関山からも毎日メールが来ていた。

学校へ登校する。いつものように休み時間は暖房前に集まり、話しをする。授業中は、隣の関山とちょっかいを掛け合っては、教科担任から怒りをかう。

そんなこんなで何変わらぬ平凡な学校生活が、今日も終わりに差し掛かった5時間目。眠っていた為、国語の板書に追い付けず焦っていた俺に、関山が言ってきた。「そう言えばさ、昼休み学習委員長来て言われたんだけど、一応学校祭も終わつたし、学年委員長達も解散になるからって、委員長皆で慰労会みたいな感じで何処か行くらしいよ」

「へえ それで??」

俺は必死に板書をしながら答えた。

「い、いやだからさ、大原も行くよねえ??って。来週の日曜にやるらしいんだけど!」

「日曜 6日かあ」

シャーペンを置いて、腕組をしながら考えた。

「何か予定あった??」

関山は不安な表情を浮かべた。

「いや、俺は常に暇人よ。OK、暇だし行く事にするわ!! 詳細聞いたら教えてくれ。」

俺は考えた結果、そう答えた。

放課後、清掃時間に念のために学習委員長の所へ行き日曜日の詳細を前もって聞きに行く事にした。

「委員長いるか??」

5組のクラスへ行き、開いているドアを軽くノックして教室を見回すと、回転幕を持った委員長が近寄って来た。

「おお、どうした大原。」

「相変わらず細くてすぐ折れてしまいそうだな。」

そんな冗談を言いながらも、俺は日曜の詳細を聞く。

「ん?? あ、あゝ、慰労会の話ね。うん、えつと詳細は」

なんか様子がおかしいな

随分とそわそわしている委員長を気にしながらも、教えられた詳細を記憶する。

「ふむ、そかそか。了解した!! 12時に新札幌の駅だな。」

当日は札幌の一駅奥にある新札幌のサンピアザ水族館へ行くため現地集合で、それから札幌へ向かいカラオケに行く予定らしい。

詳細を聞き終えると、5組をあとにして、玄関で待っていたイツメンの元へと向かった。

11月6日、日曜。

10時に携帯のアラームで目が覚める。折角の休日だというのにゆっくり寝てもいられず、重い体を起こしベランダに出ていつものように朝の一服を済ます。昨夜見た天気予報では、朝は晴れるが夕方からは雪が降る予報されていた。

今年の初雪予想は本当に当たるのか、晴々としたそらを眺めながら考え、煙草を消した。

一階に降り、母親に軽く挨拶をすると、洗面所に向かい寝癖のついた髪を洗う。髪が乾く合間を使って、クローゼットにぎっしりと並んだ服を端から順々に見ていく。

「ん、今日はこのジャケットと、このインナーにパンツ合わせてみるか。」

クローゼットの前で数分間、独り言を呟きながらも、ベージュのジャケットに、白のシャツと紫のインナー、傷んだ感じが気に入っているジーンズをはいてく事にした。

髪も整え、全ての準備を済ますと、時計は11時15分を指していて、丁度良い時間に家を出る事が出来た。

最寄りの駅から、新札幌へ向かうと、時刻はまだ30分で、時間に相当ルーズな俺が、待ち合わせ時間より早く着いてしまった。

一応集合場所の水族館へ行ってみたが、やはりまだ誰も来ていない。「軽くなにか食ってる時間もないかあ いや、どうせすぐ終わるか！！」

水族館の前で待っているのも難なんで、俺は水族館に隣接しているマックへ向かった。

注文した後、好物のエビバーガーと、コーラが乗ったトレイを受け取ると、俺はカウンターから目の届かない隅っこの席へ座り、トレイを置くゴミ箱の上から持ってきた灰皿をテーブルに置き、ハンバーガーを食べ始めた。

俺は、服装と顔つきから、よく大学生に違われた事があった。今日もまた、大人に見られない事もない格好をし、一応ではあるが用心しながらも食後の煙草をふかした。

「そういえば」
独りである事に気付き、口を閉じる。

委員長のあの戸惑い方はなんだったんだ 予定でもあったんかな

煙草を吸い終わると胸ポケットから携帯を出し、時間を確認すると、直ぐ様トレイと灰皿を片付けて店を出た。

店を出ると、水族館の入口に関山らしき背中が見えた。

「悪い！！40分もマックに居座っちまった！！って 他の人間は！？」

そこには関山の姿しか見当たらなかった。

「なんか、皆来れなくなっただけだ」

関山が困った表情を浮かべながら、各委員長が来れない理由を話し始めた。

そういう事が こいつあ上手くはめられたな

関山の話しに頷きながらも俺は思った。

「どうしよう。でも、来ちゃったんだし、二人だけでも行く??」

関山のその質問に一瞬悩んだものの、来たからには行かなきゃな、と言って俺は頷き、水族館の中へと歩を進めた。

第4話・い慰労会（後書き）

受験のため、次話お遅れます（X X*）

第5話・初雪（前書き）

第4話から 受験もようやく

第5話：初雪

「いらっしゃいませ。」

館内に入ると、海の中を演出するように穏やかな音楽がかかっていた。

ガラスで仕切られた窓口に生徒手帳を提示し、学生料金でチケットを買って、水槽へと続く通路に立っていた職員にチケットを切ってもらい、関山と奥へ進んだ。

「水族館なんてすごい久々 小4以来かも。」

「俺もだ。中学にもなると、こんな所来る機会ないしな。」

休日の為か、やはり子供連れの家族が多く、どの水槽の前にも人だかりが出来ていた。

ここには、昔何度か来た事がある。その時はまだ小さかったので、親に抱き上げてもらったり、人だかりをかきわけて行って、背伸びをして岩場に隠れた魚を覗いていたものだ。

「ねね、あっちの水槽にもすごいいるよ!!」

関山が興奮気味に、クラゲを見て和んでいた俺の服を引っ張ってきた。

「はは。何興奮してんだよ。まるで小学生だな。」

関山は一瞬、ムツと顔をしかめた。

「クラゲを見てニヤケてる人に言われたくないですよ!!」

「え!? 俺、ニヤケてたか!？」

「冗談だって さ、あっち行こう。」

関山は、より力を入れて俺の服を引っ張り、俺は抵抗もせず関山に着いて行った。

周りながら、俺達は色々な話をした。悠介が同じクラスの頼本ヨリモトと良い感じになっている事、颯太が他クラスの女子と付き合い始めた

事など、話題はやはり恋愛に関するものが多く、中でも、俺のタイプを聞いてきた時は、流石に口隠ってしまった事もあった。

関山のペースにのったまま、一通り周り終わると、俺達は休憩所のイスに腰を下ろした。

「ふう。楽しかったが、流石に端から端まで連れ回されたら疲れたな。」

俺がおごったジュースを飲みながら関山が笑った。

「ま、一通り見終えた訳だし、次の場所行きますか??」 携帯を見ると、時計は3時丁度を表示していた。

「そうだね あ、でもう 二人でカラオケも難だし、ゲーセン行かない?? 札幌のナムコとか。」

関山から手渡された空き缶をすぐ横のゴミ箱を捨てた後、俺は困れたジャケットを直すと、行くぞ、と言って関山を手招きして、室内に連結していた出口へ向かい、螺旋階段を降りて外へ出た。

札幌へ向かう電車の中、札幌までは距離は短いので俺達はドア付近に立っていた。

向かいに立っている関山は何か思い悩んだ顔をして、ほのかに赤く染まった窓の外をぼんやりと眺めていた。俺は敢えて声はかけず、何かあるな、と考えながらも、関山と同じように窓の外を眺めていた。

札幌駅は水族館とは一変して、コートをはおって急いで走る会社員や、肩を寄り添って歩くカップルなどの姿が多かった。

ナムコのあるビックカメラは札幌駅の南口を出てすぐ近くにある。ビックカメラへ繋がる階段を、降りて来る人をおかしながら関山と

競いながら駆け上がる。途中、関山が一步リードしていた俺の服を掴んだ。

「あ、あーあつー!!」

俺は階段を踏み外してスネを強打し、その場で声無き悶絶をした。その為、関山に圧倒的な差で負けてしまった。

俺が関山に遅れて階段を上り終えると、関山は誇らしげな顔をして仁王立ちしていた。

「流血ものですが。」

関山の頭を軽く小突くと、関山は、ごめんごめん、と笑いながら俺の腕を取り、ビックカメラの入口へと走った。

店内の、ほぼ満員状態のエレベーターに無理矢理入り、ナムコのある9階へ向かってる途中でも関山に掴まれた腕は自由になる事はなかった。

これじゃまるでカップルだな

9階を表示するランプが光り、分厚いドアが開ききった音を聞き終えた後、一斉に動き出した人混みに紛れ、俺達はエレベーターから出た。

ナムコの中に入ると、関山がプリクラコーナーへ直ぐ様走った。

「記念に撮ろ!!ね??」

あまりの強引さに俺は多少後退ったが、やれやれ、と呟き関山の進むがままにプリクラを撮り、その後はゲーセンの中を連れ回された。

午後6時。琴似へ戻ると、辺りはもう暗くなっていて街灯がついていた。俺達はそのまま帰路につき、駅を後にした。

「いやあ、今日は楽しかった楽しかった」

自動車の通りが少ない道を二人で歩いていると、関山が全身で伸びをした後満足気に言った。

「俺は1日中、召し使いのように振り回されてましたが。」
疲れきって猫背になった俺に、関山が、気にしない気にしない、と言って背中を叩いてきた。

公務員宿舎が立ち並ぶ道を抜け、俺の家がある住宅街に入る、あたりはより一層暗さをまし、カーテンのかかった住宅の窓から僅かに洩れる光が街灯代わりとなっていた。

「家まで送ったるよ、どうせ時間あるしさ。」

家の前に着いてから俺は関山に言った。関山が頷くと、一瞬途切れた会話を繋ぎ直し、関山の家の方へ歩き出した。しかし、その時の関山は、電車の中で見せた、何か思い悩む顔をしていた。

歩いて100メートル行った所、下手稲通り沿いの信号の辺りで、関山が立ち止まり、思いきったように話題を変えた。

「あのさ 大原の好きな人って」 やはりな 修羅場だ

関山に向けていた視線を地面に向ける。

「知ってるのか。」

気まずい空気がながれ、その中で、意を決したように関山が言った。

「うん 実は学校祭の休憩時間の時、大原達の会話聞いちゃったんだ。」

そんな

俺は黙ったが、あの話を聞かれていては誤魔化す事も出来ないと感じ、正直に言おうと決心した。

「実は尾美なんだ。好きと言うか、アイドル的存在に思ってる。」
正直に言った方がいいが、関山には苦しい言い逃れにしか聞こえない

かったかも知れない。しかし、関山の笑う声が聞こえた。俺は耳を疑った。車の音で多少かきけされてはいたが、それは確かに笑い声だった。

恐る恐る顔をあげると関山がコートの袖で顔を覆っていた。

「関山」

顔を覗き込もうとすると関山が慌てて体の向きを変えた。

「大丈夫！！前々から聞こうって思ってた。うちが大原好きだって事、本人に知られてるのわかってたから、ちゃんと心構えも出来てたから」

言葉の間には、何度もズツと鼻をすする音が入っていて、俺は関山が泣いているのを悟った。俺はどうしていいのかわからず、ただただその場に立ち尽くした。

「あ、ご、ごめんね！！なんかいきなり変な事言っただけ！！」

泣いているのを必死に隠しながらも、関山は謝った。

「いや、俺こそすまん。」

「な、なんで大原が謝んのさ！！謝るのは私だから。そういえばさ、尾美さんも大原の事、気になってるみたいだよ。頑張ってるね。私応援してるから。」

俺はそれを聞いて、喜んでいいのか悔やんだらいいのか戸惑った。直接ではあまり話さないし、尾美が俺を好きになる理由がわからなかった。

「お、尾美が俺を？？まさか」

「はは。素直に喜びなよ。私の事は良いからさ。」

その言葉を聞いて、俺は胸が苦しくなった。尾美が俺を好きかどうか以前に、関山とそれまで築きあげられた親しい関係がボロボロと崩れていくんじゃないかと言う不安。友達以上恋人未満という境界線を引きながらも、そんなのは嫌だ、と思う。それでも尾美が好きな自分を心底恨んだ。

「私は本当大丈夫。ただお願い、今までと変わらずに接してね？」

？」

関山が泣き止んだばかりの顔に笑みを浮かべて言ってきた。俺はその笑顔を見て少し安堵し、わかった、とゆっくり頷くと、二人の間に会話がなくなった。

そういえばさ、関山が沈黙の中、口を開いた。

「今日初雪予報されてたよね。今年もはずれちゃうのかな。」

今日までに見た天気予報では、見る度に違う専門の人間がでて、雲の動きなどを詳しく説明していた。去年の予報は10月下旬と予想されたが、10月の中旬には初雪が観測された。はずした事に何かしら無念さを感じ、今年は当てにいかうと天気予報も必死なのだろうと俺は思った。

「そうかもなあ 期待させておいて、結局はデタラ ン??」

そう言つて空を見上げると、頬に冷たさを感じた。

「関山 あいつら、デタラメなんか言つてなかったみたいだ。」
下を向いている関山の頭を軽く叩いて上を向かせた。

「え 嘘みたい!? 予想当たったんだ!!」

空からは、辺りの光を乱反射させた、光り輝く真つ白な粉雪が降り注いできていた。

「すごい タイミングが良いというか悪いというか」

関山はそう言った後、焦ったように時計を見る素振りを見せた。

「あ、今のは変な意味じゃなくてその い、今何時??」

俺は関山の挙動不審なところを見て笑いながら、7時になるところだ、と答えた。

「それじゃあうちはそろそろ行くわ!! 送るのここまででいいから。」

そう言つて関山は点滅している信号を渡つていった。

俺はそれを見送り、姿が見えなくなつてから家の方向へ向きを変

えた。

すると突然遠くから関山の声が聞こえ、すぐに俺は振り返った。関山が道路を挟んだ歩道のところに立っていた。

「なしたんだ??」

俺が大声で関山に返事をする、彼女は手を口の横にたて、叫んだ。

「うち、絶対諦めないから!!ずっと狙ってるから覚悟しときなよ!!それと、実は今日のは」

「お前の作戦だったんだろ??」

辺りを歩いてた人の視線が気になったが、構わずに俺は叫んだ。

「し、知ってたのかい!!いじめだあ」

恥ずかしさを堪えきれなかったのか、彼女はそう言って家の方へ走っていった。

「はは つくづく面白い奴だな」

少しその場に止まり、関山が戻ってこない事を確認し、振返ると信号待ちをしていた人達が薄笑いしていた。俺は逃げるように家へと走った。

尾美が俺を

ベランダで煙草をふかし、関山の言葉を思い返す。

「まあどちらにしろ、善は急げってな ここはいつちょ玉碎覚悟で言ってみますか!!」

少し関山にうしろめたさを感じつつも、俺は尾美への告白を決意した。

第5話・初雪（後書き）

6話をよろしく、（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3900a/>

～最後の願い～

2011年1月16日02時26分発行